

近世久米村士族の喪葬礼に見える『家礼』の変容—「誌石」・「祭文」を中心に—

劉 書鈺 (関西大学大学院)

要旨

近世琉球 (1609~1879) においては、朱熹 (1130~1200) の『家礼』が久米村儒学者の礼制思想に大きな影響を与えた。しかし久米村士族の冠婚葬祭は、すべて『家礼』の内容に従って執り行われていたわけではない。康熙 52 年 (1713)、一部の久米村士族が王府に『家礼』の儒教儀礼に即して葬祭礼を行いたい旨を申し出て許可された。しかしその後、康熙 58 年 (1719) に葬祭礼に用いられる品物が多く調達することも難しいという理由により、この命令は多くの久米村士族の反発を招き、王府は吟味の上、しかたなく王命を撤廃することになった。以後、久米村士族の葬祭礼は以前のように琉球仏教式に従って執り行われるようになった。

しかし久米村士族は表面的に琉球の葬祭儀礼に従っていたが、裏では家礼式の祭礼をとっていた。また久米村士族である鄭為基 (1823~1886) の『嘉徳堂規模帳』では、邱濬 (1421~1495) の『文公家礼儀節』から「不作仏事」(仏事を作さず)と「喪家、不招僧道作仏事」(喪家、僧・道を招きて仏事を作さず)の内容を引用して、仏教の葬祭礼をできるだけ執り行わないよう述べている。さらに琉球の墓制は儒式のような個人墓とはかなり異なり、家族墓が主流である以外、墓に墓碑を立てる例もまれである。しかし、それにもかかわらず久米村士族の墓制には依然として儒教儀礼の痕跡が見えるのである。

本稿ではこれらの歴史事項を背景に、朱熹の『家礼』と邱濬の『文公家礼儀節』における「誌石」と「祝文」(祭文)という二つの項目を取り上げ、久米村士族の礼式集である『四本堂家礼』(1736)と『嘉徳堂規模帳』にある関連項目と比較する。儒教儀礼における「誌石」と「祝文」が久米村の儒学者たちにどのように理解され、また久米村の中でどのように変容されたのかについて考察したい。